

平成二十年度神農祭記念講演

『神農本草經』の問題

真柳 誠

本書の問題は多岐にわたるが、まず「くすり」「薬」「本草」とは何かから考えてみたい。ついで中国医薬古典全般の問題と出土医方書に触れたうえで、本書の問題を復原方法から議論してみる。その上で各内容すなわち序録・収載薬・条文・思想の特徴を分析し、最終的に何時・誰がどのようになに編纂したのかを推測してみたいと思う。

はじめに

『神農本草經』は中国最古の薬物学古典として知られる。

これもあって、日本では医家・薬家による神農を祀る行事が江戸期より定着してきた。湯島聖堂の神農祭も、そうした伝統の延長にある。しかし『神農本草經』自体は早くに散佚したため、諸書に遺る佚文から内容の大体をうかがい知ることができるようにすぎない。むろん近世以降は中国と日本で幾度も輯佚復原がなされ、相当に精度を上げてきている。とはいえたが、今回の記念講演にご指名いただいたのを機会に、いささか卑見を述べさせていただくことにした。

— 「くすり」の認知と使用目的

犬猫を飼つたことがあれば、冬毛から夏毛に替わる時期になると彼らがイネ科植物などの葉を食べ、尖った葉先の刺激で胃袋にたまつた毛玉を嘔吐するのを見たことがあるかもしれない。これはまったく本能的な行動と思われる。

一方、京大靈長類研究所の現地調査と研究によると、チンパンジーは強い薬理成分のある植物数種を症状ごとに摂取し分けており、現地の人々はこれに倣い薬草として使用している。ならばヒトも有史以前から「くすり」を認知し、使用してきたことは疑いなかろう。

有史以前の認知は、食物をさがす過程で何かの効果を偶

然発見したため、と考えられる。言い換えるなら、ヒトは有用天然物の認知を、生命維持に必要な野菜・穀物・果実・魚介・禽獸の食物から、病状を緩解ないし治療する効果のある草木等の薬物まで、徐々に拡大させてきた。そして堅く朽ちることのない金石まで利用し、その「エネルギー」で強壯や不老長生を得ようとする発想や試みもあつたに違いない。有史以降になると全古代文明に薬物の記録があり、ラテン語でマテリア・メディカ、漢語で本草と呼ばれる分野で知識が集積してきた。

このような「くすり」の使用をみると、目的はヒトの生

命維持本能を満たすためといえる。その意味において薬物と食物は同根異枝であり、二十世紀になつて中国で「薬食同源」、さらに日本で「医食同源」の語彙が生まれた背景となつている。⁽¹⁾

そこでヒトの生命維持本能の面から、「くすり」としての食物と薬物を考えてみたい。むろん食物とは日々の食用に適する物、薬物とは日々の食用に適さない「くすり」のことで、ともにヒトにとつて薬用価値があると考えられてきた。「くすり」の効果を求めて両者を使用する目的は、大きく次の四段階に分けができるだろう。

第一段階は、病気の苦痛を緩和や除去する「治療」が目的の薬物と食物。第二段階は、病後や疲労衰弱から回復する「滋養」が目的の薬物と食物。第三段階は、日常の体調を維持する「保健」が目的の薬物と食物。第四段階は、生命を維持し続ける「不老長生」が目的の薬物と食物である。

はてしない新薬の開発、バイアグラや様々な健康食品の流行をみるまでもなかろう。ヒトはおそらく有史以前から現在まで、以上の全段階に対応する薬物や食物を、その生命維持本能ないし欲望から求め続けてきた。さらに未来まで求め続けていくに違いない。

後述することになるが、『神農本草經』（以下は『本經』と略す）が記載する「くすり」（純然たる食物も収載される）は、以上の全段階に応えようとしている。つまり『本經』は決して中国本草の萌芽などではなく、以上の各段階を包括する明確な意図をもつて編纂された書なのである。

二 薬と本草

「くすり」に関連し、漢語としての「薬」と「本草」も

押さえておきたい。

藤堂説によれば、轢（車でひきつぶす）・鑠（金属を摩滅させる）は薬の同系文字なので、薬の原義を「小さくつぶした植物の粉末」とする。⁽²⁾前二世紀に埋葬の馬王堆漢墓から出土した『五十二病方』の治方は、多くがつぶしてから調剤するので、当説を傍証しよう。そもそも薬と草が通用することは、『呂氏春秋』孟夏篇に「是月也、聚蓄百藥」とあり、高誘がこれに「是月陽氣極、百草成」と注することでも首肯できる。

他方、本草については、『漢書』郊祀志の成帝（前二三〇前七）条に「本草待詔」、樓護伝に「護誦醫經、本草、方術數十萬言」の記述が初出する。したがつて遅くとも前漢時代には、「本草」の語彙や「本草待詔」という職称、樓護が數十万言を暗誦した一部をなす書物のあつたことが知られる。

なお『漢書』芸文志に「經方者、本草石之寒溫、量疾病之深淺」とあることから、本草を「草に本づく」と解釈する説もあるが、どうも当たらない。それは樓護伝で本草を医經（医の經典）・方術（方の術）と並列し、『漢書』芸文志・方技でも書物を医經・經方（經典の処方）・房中（房室

の中）・神仙（神と仙人）に分類しており、それら語法と「草に本づく」が合わないからである。他方、『呂氏春秋』の本生篇・本味篇、『淮南子』の本經訓、『論衡』の本性篇、医学古典では『素問』の本病論篇（亡）や『靈樞』の本神篇・本藏篇の用例からすると、「本」はそれ以下の語の「本質」を意味する。とするなら、本草とは「草（薬）の本質」と理解するのが妥当と思う。

三 出土医方書と『本經』の相違

現在に内容が伝わる中国医学古典には、『素問』『靈樞』『本經』『難經』『明堂經』『傷寒論』『金匱玉函經』『金匱要略』がある。各書は先秦からの伝承も含め、およそ漢代に原形が編纂されたと考えられている。しかし『漢書』芸文志に同名書は一点として著録されない。さらに、いずれにも入り組んだ問題があり、歴代の研究者をなやませ続けてきた。

その問題とは、第一に不明瞭な成立と作者である。これがおよそ分かる書は『傷寒論』『金匱玉函經』『金匱要略』

しかない。それとて張仲景が三世紀初に編纂した書に「由

來する」、というレベルである。第二の問題は不明瞭な伝承と書誌にある。宋刊本以前の文章におおむね遡ることができるのは、敦煌出土書や遣唐使将来本に引用文が多い『本經』しかない。さらに以上に起因する死語・隱語・訛字・誤字や、錯綜した内容と思想が混在する第三の問題もある。それゆえ各古典とともに釈字・訓詁や理解の困難と混乱が現在まで続き、日中間での見解の相違も招いてきた。

そこで『本經』にある上述問題の的を大きく絞るため、

漢墓から出土した医方書『五十二病方』『武威漢代医簡』とあらかじめ比較しておきたい。

まず記述目的でみると、出土医方書の大部分は病氣治療だが、『本經』は病氣治療のみならず、滋養・保健・不老長生（一部に不死）という、「くすり」に期待される全領域をカバーしているのが際だつ。編成では医方書の多くが病氣別、ないし処方別という自然な形式になつてゐる。一方、『本經』はモノ別編成だが、三六五薬を三才による上中下分類に振り分けており、意図性が明瞭にうかがえる。また医方書が記載する治方に複合薬处方は少なくないが、『本經』が実際の複合薬处方に言及することは基本的になく、

臨床の現場から一步退いていると思わざるをえない。

以上からすると、出土医方書の原本を著述ないし編纂したのは、当然ながら臨床家の可能性が高い。一方、『本經』の編纂者はどうも臨床家に思えない。ならば不老長生や不死をうたつた方士だつたのか、あるいは薬物の実情に詳しい採薬者だつたのか、それとも効能をうたつて利を得た売薬者だつたのか。ここに『本經』の問題をとく糸口があるようと思える。

四 陶弘景の整理と唐宋の本草書

華佗の弟子、吳普が編纂したとされる三世紀中ころの『吳普本草』は、『齊民要術』や『太平御覽』ほかに佚文がみえる。それらからすると、当時は神農以外にも黃帝・岐伯・扁鵲・雷公などを称する、系統と内容の異なる本草書が存在していたらしい。『吳普本草』が引用する神農の氣味は、高い割合で『本經』のそれと一致するのである。そして現在に内容全体がほぼ伝わるのは、後漢に「原形が編纂された」と考えられる『本經』系統しかない。

のち『本經』は、陶弘景が『神農本草經集注（本草集注）』

書した。

を五〇〇年の直前に編纂した段階までの伝承で、収載薬数や条文などに相当の混乱が生じていた。それは敦煌本『本草集注』序録に、「今之所存、有此四卷、是其本經。（中略）魏晉以來、吳普李當之等更復損益、或五百九十五、或四百卅一、或三百一十九。或三品混糅、冷熱舛錯、草石不分、虫樹（獸）无辨。且所主治、互有多少」と弘景が記すことから分かる。当事情もあって彼は『本草集注』を編纂したのだが、敦煌本序録や他の出土文献の記載と私の解釈によれば、おそらく以下の過程を経ていただろう。

①弘景は『本經』を四巻本といい、その収載数が五九五薬・四三一薬・三一九薬の少なくとも三種の伝本を『本草集注』編纂の底本とした。同時に彼が自注で多数引用する「仙經」「仙方」や、『本經』系以外の本草諸書、また歴代名医の医方書等を参照したことも疑いない。

②彼は各伝本の共通記載と一定の文体などから判断し、『本經』本来の三六五薬とその条文を抽出して朱書した。

③同時に各伝本に共通して記載されない特徴から、後世追記された条文および追補された三六五薬とその条文を参考各書も含めて抽出し、それらを「名医別録」文として墨

書した。

④さらに全七三〇薬に対し、從来からあつた配合原則の「薬對」文と自注を小字双行で墨書し、『本草集注』三巻とした。その上巻は総論の序録で、中・下巻の薬物各論では玉石草木などの自然分類中に上中下の三品分類を併用した。

⑤この三巻の巻子本は各論の中・下巻が長すぎたため、弘景段階ないし七世紀前半までに小字双行文が一字低頭の大字單行に改められ、中・下巻を各々三巻に分けた計七巻の巻子本に再編された。

『本草集注』そのものは、後述する二点が部分的ながら出土しているにすぎない。しかし本書の七巻本に基づき増補・改訂した『新修本草』二〇巻を唐政府が六五九年に勅撰し、『本經』文と「名医別録」文を朱墨で雜著する書式も踏襲した。『新修本草』自体はさいわい、敦煌出土本と遣唐使将来系の仁和寺本により約半量が残存する。宋代になると『新修本草』を核に雪だるま式に増補・改訂した勅撰本草が幾度か出版された。うち大觀二年の『大觀本草』によると『新修本草』を核に雪だるま式に増補・改訂した勅撰本草が幾度か出版された。うち大觀二年の『大觀本草』による金一二一四年復刻版（杏雨書屋蔵）と、政和六年の『政和本草』に基づく蒙古一二四九年復刻版（中国國家図書館蔵）とが現存最古本で、ともに全巻が揃っている。

したがつて以上の編纂過程を正確に遡上できるなら、『本經』四巻は復原可能となる。いま通行している『本經』はおおむね、この歴史を遡つて輯佚・校訂された復原本である。ただし使用した史料の有無や善本性に相違があり、ものはや無価値となつた復原本もある。また当手法でたとえ正確に復原できたとしても、陶弘景の校訂以前には基本的に遡りえないことに注意しなければならない。



図 1



図 2 トルファン本『本草集注』

らは七〇三年以降に廃絶された溝 SD 一〇五から、まとまつて出土した典藥寮関係のものだつた。図 1 の右は木簡七四番の表面、左は真柳の模写である。

この「本草集注」という書名は、七〇三年前後の日中の著録や伝来状況から判断して、陶弘景の『本草集注』以外にありえない。そして弘景の『本草集注』に二巻本は不可能なので、「本草集注上巻」の墨書は三巻本を指すと考えら

五 出土した『本草集注』と通説の問題

藤原宮（六九四～七一〇）の遺跡から「大宝三年（七〇三）」「典藥」、さらに「（本）草集 本草集注……本本草」と習書された木簡の削屑、「本草集注上巻」と記された木簡（七四番）などが出土し、一九六九年に報告された。これ

れる。

他方、ドイツのグリュンヴェーデルヒル・コックらが、一九〇二～一二年の四回の探検で得た品々の中には、トルファン出土の『本草集注』断簡もあつた。現在はベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーの、トルファンコレクションに所蔵される図2である。

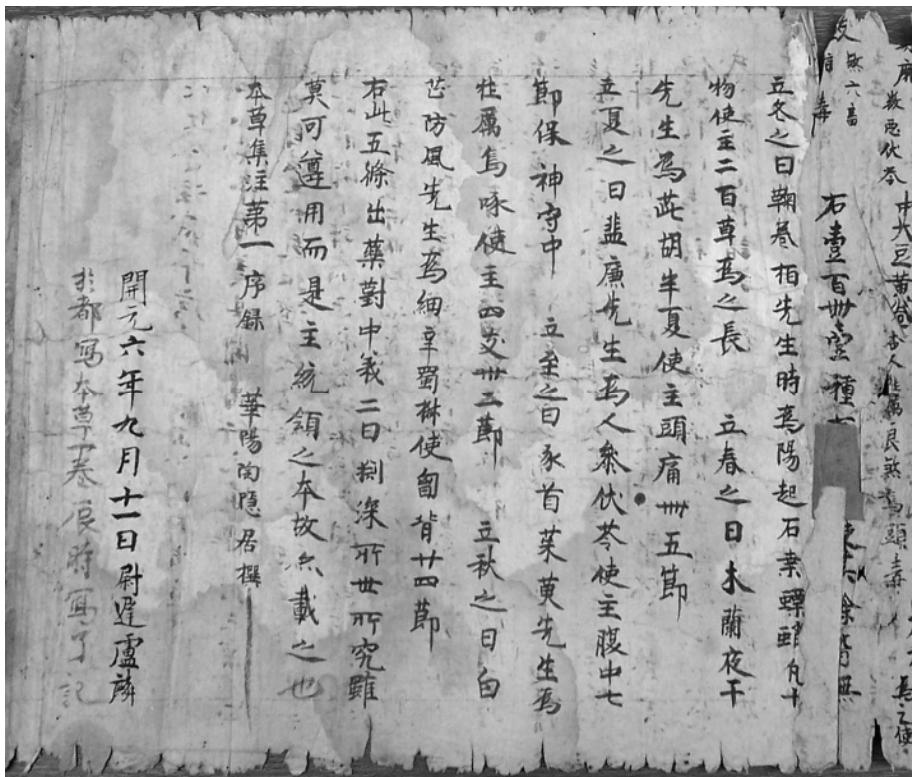


図3 敦煌本『本草集注』

ヨンに所蔵される図2である。この断簡に唐の避諱はみえないが、書風より唐初・七世纪初頭の筆写と判断される。そして朱墨雜書・小字双行注の書式と単位面積あたりの字数から、三巻本『本草集注』の卷下の断簡と判断された。⁽³⁾

さらに大谷光瑞探検隊の橘瑞超が、敦煌莫高窟より一九一二年に将来した七巻本『本草集注』の卷一「序録」部分（図3）も、龍谷大学大宮図書館に所蔵される。図のように、巻末に「開元六年（七一八）九月十一日 尉遲盧麟／於都写本草一卷 辰時写了記」の識語があるが、第一行と第二行の墨色が違うため、捏造説もあつた。ただし近年、本文全文字との比較から識語は後世の加筆でなく、当巻子も間違いなく七一八年の筆写と確証されている。⁽⁴⁾

ここで陶弘景による『本草集注』の編纂過程について、従来の通説（岡西為人説）を述べておきたい。これら出土文献の検証からすると、先に私が述べた①～⑤の編纂過程を考えるべきで、通説は成立しえないからである。

岡西氏によると、弘景は第一に、「經」字のない『神農本草』四巻の伝本を整理して三六五薬とした。第二に当三六五薬につき『名医別録』という書から『神農本草』と異なる

る条文を補填。第三に『名医別録』から『神農本草』にない三六五葉と条文も採録し、七三〇葉で「經」字のある『神農本草經』三巻を最初に編纂した。この三巻本は朱墨の経文だけで構成される。第四として、自編の三巻本に「藥対」文と自注を増補して七巻本『本草集注』を編纂した。そして注のない三巻本より注のある七巻本の方が便利なので、一般には多く七巻本が用いられた、という。

以上のように、弘景は無注本『神農本草經』三巻と有注本『本草集注』七巻の一書を編纂した、と岡西氏は考えている。^{⑤⑥}しかし『本草集注』にも三巻本があつたことは、藤原宮木簡の記載から明らかだろう。残念なことに、氏は当木簡の存在に気づいていなかつた。しかも歴代の著録に三巻本『本草集注』はみえない。一方、トルファン出土断簡の縦横寸法が逆に報告されていたことで、渡邊氏は面積あたりの記載可能字数を誤算し、七巻本の断簡と判断していた。^⑦それゆえ岡西氏は三巻本『本草集注』の存在を否定するため、以前の『本經』は「經」字のない『神農本草』四巻で、弘景は「經」字がある『神農本草經』三巻を編纂したという苦しい解釈をしたらしい。以上を要するに、岡西氏が考えた弘景の無注本『神農本草經』三巻は存在せず、

それは弘景の有注本『本草集注』三巻の誤認だったのである。

ともあれ、『本經』の旧態に遡るための最も有力な史料は『本草集注』しかない。その姿は三巻本のトルファン本、七巻本の敦煌本から窺うことができる。しかし両者は『本草集注』の一部でしかなく、『本經』に迫るには別史料も用いなければならない。

六 『本經』に遡る

『本經』の全文を収録した書では『本草集注』が完全だった。のち唐政府は『本草集注』七巻本を増補して『新修本草』二〇巻を編纂し、うち計一〇巻が京都の仁和寺等から幕末に発見（図4）されている。敦煌からも『新修本草』は一部ながら出土している。また日本では、『新撰字鏡』『本草和名』『和名類聚抄』『医心方』『弘決外典抄』『政事要略』等に、『新修本草』の佚文が保存された。さらに前述のように、宋政府編纂の『大觀本草』系と『政和本草』系の版本に、『新修本草』の全文章は基本的に踏襲・引用されてきた。

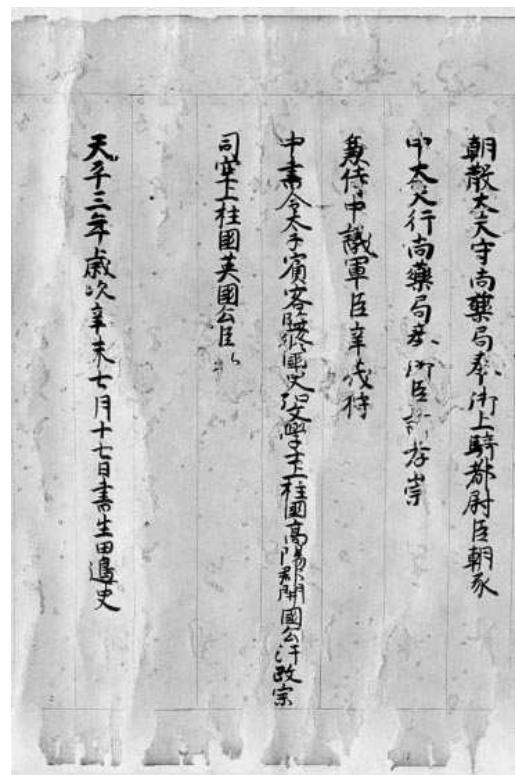


図4 仁和寺旧蔵『新修本草』
(杏雨書屋所蔵)

た。しかも本書は隋隋使将来本に由来していた。当卷子本と、隋『諸病源候論』に引用される『小品方』佚文には次の記載がみえる。⁽⁹⁾

檢神農本草經 說草石性味 無對治之和(諸病源候論)所引)

本草藥族、極有三百六十五種。其本草所不載者、而野間相傳所用者、復可數十物……

又撰本草藥性要物所主治者一卷、臨疾看之。增損所宜、詳藥性寒溫以處之……

述用本草藥性一卷第十一、灸法要穴一卷第十二卷。右二卷連要方合十二卷……

(以上、卷子本『小品方』卷一)

当記載より、『小品方』一二卷を編纂した陳延之は、三五種を収める『本經』を実際に参照し、本書卷一の「本草藥性」篇を編纂していたことが知られた⁽¹⁰⁾。

ところで、図2のトルファン本『本草集注』天鼠(コウモリ)屎条には、以下のように記される(傍線部は朱字のモリ)。屎条には、以下のように記される(傍線部は朱字のモリ)。

『本經』文)。

すなわち小曾戸氏と真柳は一九八四年、尊經閣文庫所蔵の鎌倉末期卷子本医書が『小品方』卷一であるのに気づい

天鼠屎。味辛寒、有毒。主治面癰腫、皮膚説説時痛、腹中血氣、破寒熱積聚、除驚悸、去面黑奸。一名鼠沽、

一名石肝。生冷浦山谷。十月十二月取（以上は大字文）。

惡白斂、白薇（以上は小字の「藥對」文）。方家不用、世不復識此耳（以上は小字の陶弘景注文）。

この内容に注意すると、以下の順次で記載されているのが分かる。

正名——氣味——毒性——主治————名——出處——採取時期——藥
對文——弘景注

当順次は前後の条文でも一致しているので、『本草集注』各論の条文はおよそ同様に統一されていたらう。一方、『小品方』卷一本草篇の佚文および『太平御覽』所引の『本草經』「本草」佚文を検討すると、両者の記載は以下の順次で一致していた。

正名——一名——氣味——出處——主治

このように『本草集注』で朱書された傍線部、つまり『本草經』内容の記載順次は陶弘景以前の『本經』佚文と大きく相違する。ならば当相違は、彼が『本經』の各種伝本ほかに基づき、『本草集注』を編纂した際の改変に疑いない。弘景の改変は他にもある。

『小品方』卷一本草篇からと確証された佚文は一八条

と少なく、多くは「一名」部分の断片的引用だつた。ただ

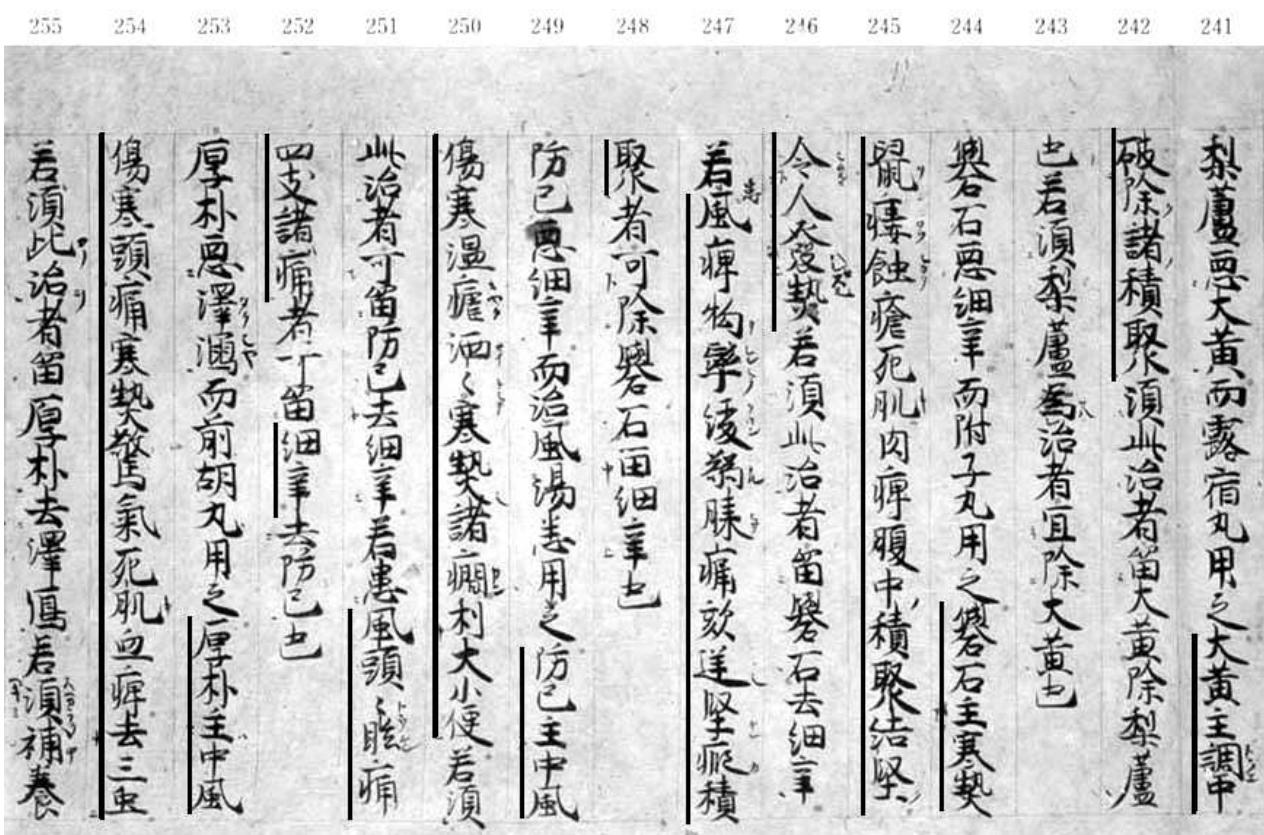


図 5 古鈔本『小品方』（尊経閣文庫所蔵）

し現存する卷一部分の「述增損舊方用藥犯禁決」には、図5に傍線で示した『本經』主治文の佚文と目される記載が少なからずある。そして「大黃、主調中……」のように、いざれも「主」の一字から書き出す。ところが『本草集注』はトルファン本の図2で分かるように、「主治」の二字に作る。さらに唐政府が編纂した『新修本草』は、仁和寺本も敦煌本も「主」の一字に作る。『本草集注』の「主治」を『新修本草』が「主」に改めたのは、唐高宗・李治の避諱で「治」を削除したと判断している。

他方、『太平御覽』の「本草經」「本草」佚文では「主」の場合が多いが、一部は「治」に作る。当混在は『太平御覽』がこれら佚文を引用した文献での唐代避諱とも思える。しかし遣隋使将来本系で、唐代避諱もない『小品方』卷一末尾の医方主治文でも、「主」で記す条文と「治」で記す条文が混在する。したがって、すでに弘景以前で両者が混用されていたため、『本草集注』では併用して「主治」に統一した可能性が高い。

『本經』の復原には以上の他に、収載藥の分類・配順や漢代の文字に遡る問題など、まだ議論すべき課題が多い。とはい『本經』の復原はすでに宋代から始まっている。

中でも清末・孫星衍本の精度が高いが、弘景による前述の改変に気づいていない。なお清代には、史料価値のない『本草綱目』に基づく復原本まで出現していた。

日本では孫星衍本などの刺激で、江戸後期にまず鈴木良知が復原を試みた。ついで狩谷棟斎の校定本があり、南京図書館蔵の山田業広手沢本を見ると相当のレベルに達している。しかし手順をふむため、幕府医学館の小島宝素は、第一に仁和寺本『新修本草』に欠けた部分を復原した。さらに小島尚真ら医学館に集つた若き俊英らは、『新修本草』『本草和名』『医心方』など当時発見された最善の古文献も駆使し、第二に『本草集注』を精緻に考証復原している。その第二次稿本は一九〇一年に来日した羅振玉が購入して中国へ渡つたが、岡西為人が中国で再び入手して一〇〇八年にご子息より京大人文研に寄託された。

以上の段階をふまえ最終的に復原されたのが幕末の森立之本で、その精度は孫本・狩谷本を遙かに上回り、前人未踏の域に達している。現代も森本をベースに、中国で尚志鈴本や馬繼興本が復原された。しかし上述した記載順次や主・治の問題、日本伝存文献と出土文献の使用などで、いささかの瑕疵なしとはしない。今後は『小品方』や敦煌本・

トルファン本『本草集注』も十分に利用し、さらなる精度の向上が俟たれる。

七 『本經』序録の検討

前述した原初の『本經』四卷は、首巻が総論の「序録」で、さらに各論の上巻（上藥）・中巻（中藥）・下巻（下藥）から構成されていたと推定される。そこで『本經』の問題を明らかにするため、まず序録に見え隠れする思想等から分析してみたい。序録は一二条からなり、以下は森本を底本に順次検討する。

- ①上藥、一百二十種爲君、主養命、以應天、無毒、多服久服不傷人。欲輕身益氣不老延年者、本上經。
- ②中藥、一百二十種爲臣、主養性、以應人、無毒有毒、斟酌其宜。欲遏病補虛羸者、本中經。
- ③下藥、一百二十五種爲佐使、主治病、以應地、多毒、不可久服。欲除寒熱邪氣破積聚愈疾者、本下經。

この三条は上中下藥の分類定義で、全体は天地人の三才説、君臣佐使の儒家思想、不老長生の神仙思想で作文され

ている。また前二二一年以前の「顓頊曆」などで一年を約三六五・二五日と定めた数に合わせ、上中下藥を計三六五種とする。無毒・有毒・多毒の重視も注目される。

④藥有君臣佐使、以相宣攝。合和宜用一君二臣五佐、又可一君三臣九佐也。

第四条の君臣佐使による合和（処方）論の数には、陰陽五行と三才説が用いられている。

⑤藥有陰陽配合、子母兄弟、根莖華實草石骨肉。有單行者、有相須者、有相使者、有相畏者、有相惡者、有相反者、有相殺者。凡此七情合和視之、當用相須相使者良、勿用相惡相反者。若有毒宜制、可用相畏相殺者、不爾勿合用也。

第五条の前文は陰陽・五行と藥物来源に基づく配剤をいう。後文の七情による配剤論は後世の諸「藥對」書で発展するが、主眼は有毒作用の発現防止にあり、当時そうした議論があつたことを推測させる。

- ⑥藥有酸鹹甘苦辛五味、又有寒熱溫涼四氣、及有毒無毒。陰乾曝乾、採治時月、生熟、土地所出、眞偽陳新、竝各有法。

第六条では藥の本質として五味と四氣を陰陽五行説で述

べ、有毒無毒も強調する。さらに薬物の採取・加工・新旧・真偽という、薬業者の視点もみえる

⑦藥有宜丸者、宜散者、宜水煮者、宜酒漬者、宜膏煎者、亦有一物兼宜者、亦有不可入湯酒者、竝隨藥性、不得違越。

第七条は一種の製剤論で、製剤業者の視点がうかがえる。

⑧欲治病先察其源、候其病機。五藏未虛、六府未竭、血脉未亂、精神未散、服藥必活。若病已成、可得半愈。病勢已過、命將難全。

第八条で初めて治療者の視点が出現するが、主眼は「治る病にだけ服薬」させる姿勢にあるといえる。

⑨若毒藥治病、先起如黍粟、病去即止。不去倍之、不去十之、取去爲度。

第九条は毒性のある薬で治療する時の心構えで、とても慎重な用薬法といえる。その背景には、中毒死や悪化させた経験が想像される。

⑩治寒以熱藥、治熱以寒藥。飲食不消以吐下藥、鬼注蠱毒以毒藥、癰腫瘡瘤以瘡藥、風濕以風濕藥、各隨其所宜。

第一〇条は病気（病理）に対応した薬物（薬理）の使用

を述べ、薬学の視点が確立していたことを示す。また、そうした効果の認識をベースに処方を組んだ経験が背景にあるのを推測させる。

⑪病在胸膈以上者、先食後服藥。病在心腹以下者、先服藥後食。病在四肢血脉者、宜空腹而在旦。病在骨髓者、宜飽滿而在夜。

第一一条は病の所在に応じた服薬時期を、食事の前後および昼夜の空腹・満腹から述べる。単純な発想ではあるが、類似の記載は他の医学古典にみえず、いささか異質に思える。食の作用を重視する「食医」の思想背景を示唆するのかもしれない。

⑫夫大病之主、有中風傷寒、寒熱溫瘧、中惡霍亂、大腹水腫、腸澼下利、大小便不通、賁豚上氣咳逆、嘔吐、黃疸、消渴、留飲、癖食、堅積癥瘕、驚邪癲癇、鬼注、喉痹、齒痛、耳聾、目盲、金創踒折、癰腫、惡瘡、痔瘻、癰瘤、男子五勞七傷、虛乏羸瘦、女子帶下、崩中、血閉、陰蝕、蟲蛇蠱毒所傷。此大略宗兆、其間變動枝葉、各宜依端緒以取之。

一二条は当時の疾病認識を列記する。その筆頭に中風・傷寒を掲げるのは、前二世紀以前の『五十二病方』に

みえず、より後世の認識と判断される。全体はまず感染性の急性病をあげ、次に慢性病の腹部症状・胸部症状・腫瘍・精神症状・頭部症状、さらに外傷・皮膚症状・精力減退・衰弱・婦人病・虫蛇咬傷に分けられる。やはり『五十二病方』の分類より相当に進歩しており、とくに慢性病の名称と分類は三世紀初の仲景医書に由来する『金匱要略』に近い。

以上の一二条文は、論点の記載順次をふくめて首尾一貫し、あたかも一人の人物が著述したようにみえる。むろん陶弘景の潤色や整理も疑うべきではある。さらに漢代から医学に転用された思想や、三六五の認識が明らかに投影されており、前二世紀以降の著述は疑いない。ちなみに経穴の数を三六五とする論は『素問』『靈樞』に幾度かあるが、実際に三六五の数に接近させた経穴を収載したのは二世紀ころの『明堂經』である。他方、漢代に盛行していた儒家思想と神仙思想は「お飾り」レベルの記載で、これは時代風潮に迎合したためと思われる。

ならば当序録は疑いなく医療関係者の著述で、陰陽五行説に三才説を併用するのも他の医学古典と共に通する。しかし針灸・経脈・経穴・臓腑論への言及が一切なく、『素問』

『靈樞』『難經』『明堂經』とは明らかに別系統と判断できよう。さらに他の医学古典に共通する「治療への熱意」がおよそ希薄で、臨床から一歩退いた印象すらうかがえた。他方、薬学知識や製剤者・売薬者の視点を明瞭に読み取れただが、第六条の「陰乾曝乾、採治時月、生熟、土地所出」以外に採薬者の視点はみえない。

これら検討と前述した「本草待詔」の記載（前二三三～前二七）から判断するなら、当序録の著述は一世紀から二世紀前後の間と、とりあえず限定できよう。作者には、売薬に製剤もかねた薬業者を第一候補としたい。

八 『本經』各論の検討

（一）分類と配順

『本經』各論の第一特徴は序録の第一～三条と同様、薬物を上中下の三品に大別する点にある。三才を用いるのは、他の医学古典でも人体部位の上焦・中焦・下焦、経脈・病期分類の三陰三陽など少くない。三陰三陽と思われる早い記述は『史記』倉公伝にみえるので、上中下薬の三品分

類はそれら先行論説の影響であろう。

一方、『本經』の三品分類内で各薬がいかに配列されているかは、どうもよくわからない。これは陶弘景が『本草集注』を編纂した際、まず七三〇薬を自然分類で玉石・草木・虫（魚介）・獸（鳥）・果菜・米食（穀）および有名無実の六類に分け、次に各類内で三品に分類したためである。それで『本經』本来の配列への手がかりが消えてしまった。『小品方』や『太平御覽』の佚文も単独で引用されているため、手がかりにならない。

ただし弘景は彼の使用した『本經』の伝本が、「或三品混糅、冷熱舛錯、草石不分、虫樹（獸）无辨」の状態だったと、『本草集注』の序録で慨嘆していた。『本經』に本来からあつた三品分類とともに、草石・虫獸も混乱していたと彼がいうのなら、『本經』でも同様の自然分類が併用されていた可能性は十分に高い。とするならば、前漢に整理された『爾雅』の分類、釀地・釀丘・釀山・釀水・釀草・釀木・釀虫・釀魚・釀鳥・釀獸・釀畜が、無機物・草木・虫魚・鳥獸の順であり、『本草集注』と近似する点は注目すべきだろう。

（二）上藥の記載

まず上藥の条文をいくつか例示してみる。

○玉泉、一名玉札、味甘平、生山谷。治五藏百病、柔筋強骨、安魂魄、長肌肉、益氣。久服、耐寒暑、不飢渴、不老神仙。人臨死服五斤、死三年色不變。

○箇桂、味辛溫、生山谷。治百病、養精神、和顏色、爲諸藥先娉通使。久服、輕身不老、面生光華、媚好常如童子。

○牡桂、味辛溫、生山谷。治上氣欬逆、結氣、喉痺吐吸、利關節、補中益氣。久服、通神、輕身不老。

○胡麻、一名巨勝、味甘平、生川澤。治傷中虛羸、補五內、益氣力、長肌肉、填髓腦。久服、輕身不老。

葉名青囊。

いずれの条文も「正名——一名——氣味——出處」がまずあり、ついで「主治」、最後に「久服」や「鍊餌服之」を冠する文竇が大 majority に記される。この「久服」以下は近似した表現で「漠然とした不老延年効果」をうたい、趣旨は序録第一條の規定「上藥、一百二十種爲君、主養命、以應天、無毒、多服久服不傷人。欲輕身益氣不老延年者、本上經」と合致する。つまり序録と各論「久服」以下の思想は近い。

次に主治文をみると、具体的な病状や効果は牡桂条に「上

兵。鍊食之、輕身神仙。

氣欵逆、結氣、喉痺吐吸、利關節」、胡麻条に「治傷中虛羸」

しかない。他は五臓（五内）・百病・筋骨・魂魄・肌肉・氣

力・精神・顏色・脳髓によりといふ、漠然とした「滋養」

ないし「保健」の効果が記される。それをうたう胡麻は今

のゴマで問題ない。玉泉はいかなるモノか諸説あるが、鉱

石の玉に関連する液体らしい。箇桂は今のシナモンステイ

ツクに近いクスノキ科樹皮の香辛料で、純然たる薬物の牡

桂とは同属別種の関係にある⁽¹¹⁾。以上のように明瞭な治

療効果がありそうもない鉱物由来の玉泉、食物の一種である箇桂と胡麻には、「漠然とした滋養や保健の効果」がうたわれる。主治文のこうした特徴は上藥全体に共通してみえ、序録第一条の「上藥、……主養命」と合致するので、やはり両者の思想は近い。

(三) 中藥の記載

中藥の鉱物薬・植物薬・食物薬から、代表的条文を以下に示す。

○雄黃、一名黃食石、味苦平、生山谷。治寒熱鼠瘻、

惡瘡疽痔、死肌、殺精物惡鬼邪氣、百蟲毒腫、勝五

○雌黃、味辛平、生山谷。治惡瘡頭禿瘻瘍、殺毒蟲蟲、

身痒、邪氣、諸毒。鍊之久服、輕身增年不老。

○麻黃、一名龍沙、味苦溫、生川谷。治中風傷寒頭痛、溫瘡、發表出汗、去邪熱氣、止欬逆上氣、除寒熱、破癥堅積聚。

○大豆黃卷、味甘平、生平澤、治濕痺筋攣膝痛。生大豆、塗癰腫、煮飲汁、殺鬼毒、止痛。赤小豆、下水、排癰腫膿血。

各条文は「正名——一名——氣味——出處——主治」の順で記され、上藥と同じ。鉱物薬では主治文以下に、雄黃の「鍊食之、輕身神仙」、雌黃の「鍊之久服、輕身增年不老」が記載される。これは鍊丹術を前提とした不老神仙への効果だが、具体的に鍊丹法の詳細に言及することはない。「久服」を冠する表現は約半数にしかなく、その漠然とした効果も不老・神仙が減り、輕身・不飢・通神明などトーンダウンした表現が多い。

各主治文は例示した食物薬の大豆黃卷（モヤシ）・生大豆・赤小豆（アズキ）も含め、中藥の大多数が具体的な病症名をあげる。その一方、漠然とした強壮や保健のみの主治

文は、食物でもある竜眼（リュウガン）・五木耳（キクラゲ）など、数薬にしかみえない。

このように上薬と比し、各中薬の主治は具体性が増す一方で、漠然とした効果が大きく減少している。「久服」以下を記載する薬数も内容も低下していた。やはり序録二条の「中藥、……主養性、……欲遏病補虛羸者、本中經」とよく合致する傾向といえよう。

（四）下薬の記載

下薬の条文を以下に例示する。

- 青琅玕、一名石珠、味辛平、生平澤。治身痒火瘡、癰傷瘀瘻、死肌。

- 蜀椒、味辛溫、生川谷。治邪氣欬逆、溫中、逐骨節皮膚死肌、寒濕痺痛、下氣。久服之、頭不白、輕身增年。

- 水靳、一名水英、味甘平、生池澤。治女子赤沃、止血養精、保血脉、益氣、令人肥健嗜食。

やはり正名——一名——氣味——出處——主治の順でならぶ。しかし「久服」文は蜀椒など七種にあるのみで、表現も通神

明や輕身耐老にとどまり、上薬に頻出する不老や神仙はみ

えない。主治文は食物薬の蜀椒（サンショウの類）・馬刀（カワマテガイ）・桃・水靳（セリ）を含め、ほとんどが具体的病症名で、漠然とした効果だけを記す例はない。すなわち序例三条の「下藥、……主治病、……多毒、不可久服。欲除寒熱邪氣破積聚愈疾者、本下經」の規定とよく一致する。

（五）各論条文の特徴

以上の検討をふまえ、『本經』各論で定型的に記述される正名・一名、氣味、出處、主治文、久服文についても特徴と問題を考えてみたい。

①正名と一名

正名は『本經』の編者らが代表的と判断した名称であり、彼らの知見がおよぶ範囲で一般的ではないと判断された名稱を一名とし、別称がなければ記さなかつたに違いない。

この一名には、別流派の呼び名が記された可能性もあるう。

モノの名は地域（流派）と時代で変化するため、モノを分類・収載する『本經』ならば、その弁別が第一につき、正名・一名を冒頭に配したのも当然と理解できる。

正名を前二世紀以前の『五十二病方』にみえる薬名と比較すると、異体字・普通字などの相違を無視するなら、多

くは一致する。これは『本經』の内容にも前二世紀を遡る伝承が含まれる可能性を示唆しよう。とはいって、『五十二病方』の薬名が『本經』で一名とされた例もある。すなわち

『本經』の正名と『五十二病方』の薬名に該当する一名を

括弧内に入れて示すと、石龍芻（龍須）・伏翼（蝙蝠）。鳥

頭（鳥喙）・款冬（橐吾）・草蒿（青蒿）・衣魚（白魚）などである。その所以をにわかに論じることはできないが、多

	大熱	温	微温	平	微寒	寒	総数
上薬	0	26	6	56	8	29	125
中薬	0	22	9	44	8	31	114
下薬	1	31	5	31	11	39	118
総数	1	79	20	131	27	99	357

秦椒（イヌザンショウ）・秦艽（リンドウ属）・秦皮（トリネコの類）の三種がある。また蜀がつく蜀羊泉（ヒヨドリジヨウゴの類）・蜀椒・蜀漆（ユキノシタ科の低木）があり、

くは時代と地域（流派）に由来するであろう。『本經』の正名には不变かつ一般化していった古い薬名と、編纂当時の（神農系で使用されていた）新しい薬名が記されるのである。

なお正名の中には秦がつく、

秦椒（イヌザンショウ）・秦艽（リンドウ属）・秦皮（トリネコの類）の三種がある。また蜀がつく蜀羊泉（ヒヨドリジヨウゴの類）・蜀椒・蜀漆（ユキノシタ科の低木）があり、

山茱萸（サンシュユ）の一名に蜀棗がある。各薬は明らかに秦や蜀の地方特産ゆえの命名で、国名を地方名とするなら古蜀と秦の滅亡以降、つまり前漢からの名称と判断できる。

② 気味

序録六条には、「藥有酸鹹甘苦辛五味、又有寒熱溫涼四氣」と記される。そこで、まず森本の各論で各薬に記される薬氣を上表に整理してみた。すなわち上中下の三五七全薬に

記される薬氣は、大熱・温・微温・平・微寒・寒であり、うち下薬の譽石だけに規定される大熱が例外的だった。大熱を除くと、薬氣は温・微温・平・微寒・寒の五種で、最多は平、ついで寒・温が多く、微寒と微温は少ない。当分布傾向は上中薬でも大差ないが、下薬では平より寒の割合が高まる。

これで明らかに、各論の薬氣概念は「温—平—寒」の三要素が基本で、中間に微温と微寒が設定されている。おそらく三才の概念によるだろう。そして平は温でも寒でもないので、「温めも冷やしもしない」薬氣と思われる。一方、主治をみると、平とされる茈胡に「寒熱邪氣」、半夏に「傷寒寒熱」があり、いずれも寒熱往来を特徴とする少陽

病や瘧（マラリア）の要薬である。ならば『本經』各論の平には、「寒も熱も治す」薬性も含まれねばならない（¹²）。

このように各論の薬氣は、序録の陰陽説による定義「寒熱溫涼四氣」とは、概念も用語もまったく異なる。そもそも各論に涼はなく、実際は微寒で表現されていた。また序録一〇条には「治寒以熱藥、治熱以寒藥」の原則もあるが、

各論に熱藥はなく、大熱の譽石があるのみ。すると薬氣用語の各論と序録における相違と対応関係は、温—熱・微温—温・微寒—涼となり、寒は同一、平は序録にない概念用語とわかる。もし各論と同じ概念ならば、序録の規定は「又有寒平温三氣」「治寒以温藥、治熱以寒藥」のはずであるが、そう記されてはいない。原因は、各論で薬氣を定めた概念を序録の編者らが無視したか、理解していなかつたからである。つまり各論の薬氣に関するかぎり、序録とは編者が異なることを当相違は明瞭に示している。また薬氣と主治文の相関も想定するなら、主治文の一定内容も序録とは編者や時代が異なることを示唆しよう。

なお序録の「藥有酸鹹甘苦辛五味」と同様、各論では各薬味を五味で表現しており、双方に矛盾はない。他方、薬の色と味に明らかな五行相関はみえず、五行説で薬味を演

繹した可能性は小さい。しかし薬氣はその温性・寒性の作用で重視される理由もわかるが、なぜ味の規定を全薬に記さねばならないのか。その詳細は省くが、食医思想の影響で味を現代の栄養素や薬理物質に類した成分の象徴と考え、その作用を五行説で真剣に議論していた流派が漢代まであり（¹³）、その影響と推測される。

ちなみに乾漆（ウルシ）と白頭公（ヒロハオキナグサ）のみ氣味以下に無毒が記載され、他薬には毒性の有無が一切記されない。序録で毒性への注意を強調するにもかからず。他方、前述のトルファン本に「天鼠屎。味辛寒、有毒」とあつたように、『本草集注』では氣味以下に必ず毒性を記し、その大多数は「名医別録」文だつた。しかし『太平御覽』の「本草經」や『呉普本草』の神農文も毒の有無を記す場合があるので、『本經』段階でも毒性が記載される薬物はあつただろう。ところが『本經』の記載は不完全で「名医別録」が完全、かつ双方の毒性がほぼ一致していたため、陶弘景は毒性記載の大多数を「名医別録」文としたに違いない。そして双方が一致しない例外が上記の一薬で、弘景は両者に『本經』の無毒と「名医別録」の有毒を併記した。したがつて森立之も上述の事情を熟知したうえで、

いたしかたなく乾漆と白頭公にのみ無毒を記したのである。

それを誤認し、『本經』各論に毒性記載はなかつたと速断すべきではない。

③出處

各論では基本的に全薬について、その出處が「生山谷」のように抽象的に記される。それも山・谷・平・土・川・池・沢の七文字から、ただ二文字を組み合わせるにすぎない。およそ一時期の特定の人物によらないかぎり、かくも統一した表現はありえないだろう。それでも水産と平地産と山地産ほどの区別はわかり、各薬の実際の出處と大きな矛盾をきたす例は少ない。ただし蚱蝉（クマゼミの類）に「生楊柳上」、雀甕（毛虫のマユ）に「生樹枝間」とあり、この二薬だけは例外で、やや具体的に出處が記される。同様に本来は具体的な記載が多くにあつたが、のち何かの理由で抽象的に書き改められた際、この二薬だけ改変し忘れた可能性を想定すべきではなかろうか。

さらに海の字は出處に一切使用されず、明らかな海産物の海藻や海蛤（ハマグリ）まで「生池澤」と記す。つまり海産と淡水の川・池・沢産をまったく区別していない。どうも双方を弁別する知識がないか、その意図すらない内陸

の人物による記述らしい。

ところで『本經』薬の現中国での産出地は全国に分布するが、中原産が少なくない。前述の秦や蜀のつく薬名はその具体例である。他方、山田氏は『吳普本草』に記載の産地を集計し、産出が多い黃河流域にある山東の大山と冤句、河北の邯鄲、河南の嵩山に注目し、この四点で囲まれる一帯を「（吳普）本草の四辺形」と呼んでいる⁽¹⁴⁾。むろん『吳普本草』は『本經』成立以降の編纂で、そこに引かれる神農の氣味は高い割合で『本經』と一致する。同書に引用される黃帝・岐伯・扁鵲・雷公などの本草流派にしても、近接した一定の領域に存在しなければ、他と区別する流派名は必要なかろう。前述の不自然さも並考するなら、他派に産地情報をかくす必要から記載を抽象的に統一し、「（吳普）本草の四辺形」内で『本經』の原形が編纂された蓋然性は高い。当然それは全国が統一され、交易が発達した秦漢以降になる。

さらに山田氏は本草待詔と方士の深い関連などから、『本經』の編者は採薬者だつたとする。しかし採薬者がかくも抽象的に産地を表現するだろうか。たとえ採薬者がグループだつたとしても、産地が中国全土から国外までおよぶ『本

『經』の全薬について、各種情報を蒐集することができたとは思えない。それよりは製剤と売薬をかねた薬種問屋的な業者が、取り扱うすべての薬について一律に記す必要から、「生山谷」などの表現で曖昧に統一した可能性が高い。つまり彼ら神農グループのテキスト兼カタログが、『本經』の原形だったと私は考える。

ところで中国が原産地ではない外来植物も『本經』にはある。たとえば蒲陶（ブドウ）には周知のことく、前一二六年に漢へ帰還した張騫がもたらしたとの伝説がある。胡麻はアフリカ原産で、前漢に西域（胡）経由で伝わり、同じ油脂用で先に普及していた麻と区別して胡麻と呼ばれた。薏苡子（ハトムギ）は出土した漢代医書に記載がなく、『本經』所載は近縁種のジユズダマの可能性もあるが、より大粒なハトムギはベトナムに遠征した馬援が洛陽に還った四年にもたらしたと記される。さらに仲景医書の時代から現代まで重要薬の大黄は、紀元前の文献や出土医書に見えず、紀元前後ころの敦煌木簡と一世紀の『武威漢代医簡』から記載が始まる。するとこれら外来物を収載する『本經』は、紀元前後以降の編纂でなければならない。その時期を山田氏は、『漢書』平帝紀に「徵天下通知逸經、古記、天文、

曆算、鍾律、小學、史篇、方術、本草及以五經、論語、孝經、爾雅教授者、在所為駕一封輶傳、遣詣京師。至者數千人」と記される王莽が招聘した元始五年（西暦五年）の学術大会だったと指摘し、これに私も賛同する。

④主治文

『本經』の主治文は多岐にわたり、全文を統一的には分析したい。そこで文中における臓腑および類臓腑表現の記述に注目し、その記載回数から考えてみよう。ただし『本經』だけでは比較対象もないで、岡西氏復原の『新修本草』を底本に、『本經』からの各段階で増補された全文について集計した¹⁵⁾。つまり検討の対象は『本草集注』段階の本經・名医別録・薬対・陶弘景注の各文、『新修本草』で増補された薬条の新付文および編者の蘇敬らが全文に加えた注文である。

まず臓腑の記載回数を『新修本草』全体で集計すると、心六六、胃五五、肺二二、腎二〇、膀胱一九、肝一二、脾九、大腸九、小腸七、腦三、子宮一、三焦二であつた。八五〇近い主治文からすると少ない数ではあるが、自覚できる臓腑に記載が多い。また胆のみ単独の記述がない一方、六臓六腑以外の脳・子宮が少数ながら記述されていた。

新修本草 卷	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
A 所載薬数	22	30	31	40	38	37	39	35	67	27	28	45	55	72	25	37	28	193	849
B 臟腑記載数	16	8	2	25	13	13	8	10	9	17	9	5	18	6	15	14	15	23	226
記載頻度 B/A%	73	27	6	49	28	19	63	32	11	33	8	60	38	54	12			平均	
所載薬類	玉石 上	中	下	草 上	中	下	木 上	中	下	獸 禽	虫 魚	果	菜	米			有名 未用		
類別記載頻度%	31			30			31			33	8	60	38	54	12		27		

さらに臓腑に類した記載をみると、ほぼ脾胃に同義の「中」が一七九と最多で、以下は五藏・五内一一三、心腹（上腹部）八九、腸四三、腸胃二七、心下（みぞおち）二二、大小腸八、六府六、肝胆五、脾胃四、藏府四であった。この数字からも症状を自覚できる部位や臓腑の多いことが理解されるが、漠然とした五藏が多いのは当傾向と合致しない。いずれにせよ、王莽による王孫慶の解剖（西暦一六）に基づき二世紀ころの『難經』四十二難に遺された詳細な臓腑観察に比べるなら、はるかに素朴な認識であるの間違いない。

ささらに臓腑に類した記載をみると、ほぼ脾胃に同義の「中」が一七九と最多で、以下は五藏・五内一一三、心腹（上腹部）八九、腸四三、腸胃二七、心下（みぞおち）二二、大小腸八、六府六、肝胆五、脾胃四、藏府四であった。この数字からも症状を自覚できる部位や臓腑の多いことが理解されるが、漠然とした五藏が多いのは当傾向と合致しない。いずれにせよ、王莽による王孫慶の解剖（西暦一六）に基づき二世紀ころの『難經』四十二難に遺された詳細な臓腑観察に比べるなら、はるかに素朴な認識であるの間違いない。

他方、臓腑の記載を出典別にみると、本經四〇、名医別録一五五、藥對一、陶弘景注七、新修新付三、蘇敬注一四で、「名医別録」文が最多、ついで『本經』文だった。また弘景や蘇敬の注では大多数が「名医別録」と『本經』の引用で、自説中には基本的ない。なお臓腑と関連する経脈関連では、大棗の『本經』文に「助十二經」と記されるのみだった。この点も、針灸治療から経脈概念を発展させた医家の流派が、一世紀ころに原形を編纂した『素問』『靈樞』とは大きく異なる。しかし三六五薬を網羅する発想は、『素問』『靈樞』を前提に三六五經穴（ツボ）を収載しようとした『明堂經』の編纂に刺激をあたえたに違いない。

ともあれ本集計から、臓腑や身体部位を主とする記載が『本經』に少なく、「名医別録」で飛躍的に増加したことがわかる。それは薬効の表現方法における臓腑概念の普及と、それを記述した主体の変化を示唆しよう。「名医別録」文の記述者はみな臨床家、と弘景がいうからである。

以上の集計を『新修本草』各論の卷三～二〇について示したのが上の表である。この薬類の玉石・草・木で上中下別の臓腑記載頻度をみると、明らかに上薬で頻度が高く、いずれも上▽中▽下となっている。とりわけ玉石上薬は七

三%と高い。つまり大多数に「漠然と心身の健康によい」と記す上藥では、それを臓腑で表現することが多い。『本經』上藥の玉泉に「治五藏百病」、雲母に「安五藏」などとあり、『新修本草』全体では一一三回も五藏の記載があつた理由である。

さらに類別全体でみると、平均は二七%であるが、果類の六〇%と米類の五四%が突出し、虫魚類が八%と極端に低い。あまり薬効が期待できない果類や米類に効果をうたら、胡麻の「治傷中虛羸、補五内（臓）」のように、臓腑や類臓腑の表現を多用するしかないだろう。こうした主治文は臨床経験からの帰納より、半ば「作文」された可能性が推測される。漠然とした滋養・保健・不老効果をうたう上藥も、およそ同様だろう。一方、臓腑表現が平均より著しく低い虫魚は、その外見や生態のためか特殊な効果が期待され、臓腑表現が不要だったのかもしれない。

しかも心身の衰弱や老化になやむ儒者・官僚と皇族には序録で君臣佐使をうたい、上藥を販売する目的も秘めている。彼ら富裕者が病になれば、自身や医家を介して中下藥を求める。そのため実際に効果のある薬物を中下藥に配し、主治文は「寒平溫」で藥氣を定めた先行文献から主に採用したが、同時に他の文献も参照しただろう。こうした多面的配慮と計算があり、序録と相乗効果が生まれるよう『本經』の主治文は再編成されているのである。

鳥獸虫魚介では雁肪・熊脂・牛・馬・狗・鹿・豚・阿膠・蜂子・鯉・龜・鼈・烏賊・蟹・牡蠣・蛤である。そして上藥ならば漠然とした効果、中下藥でははつきりと主治症状が記される。

葱、スパイス・調味料では箇桂・乾薑・秦椒・蜀椒・石蜜、

⑤久服文

すでに検討したが上薬のほぼすべて、中薬の約半数、下薬の一部で主治文の末尾に「久服」を冠し、「不老・軽身・神仙・不飢」などの定型句が記されていた。この久服文は序録と対応するので、序録の作者が各論の久服文を作成し、上中下の分類後に一括付加したのは明らかだろう。なお「久服……不死」は、水銀と石龍芮（イグサ科の一種）にしかみえない。序録を含めて他に「不死」はうたわれないので、これをテーマとした方士が作者ではない。そして上薬などの「久服」で最大の実利があるのは、それを買い続けてもらえる薬業者だろう。すなわち彼らこそが各論を編纂し、序録を著述したのである。

九 結論

いま復原可能な『本經』は、思想・収載薬・薬名などの特徴と正史の記載から、中原の薬業家で神農を称するグループにより、西暦五年に原型が編纂されたと考えられる。彼らが使用した文献には、かなり古い伝承と思想が含まれ

ており、それが本書の薬名・氣味・主治文に残存していた。

この編纂過程は次のように推測できる。

（一）およそ三六五薬の氣味・出處・主治に関する記載を、先行文献・伝承から蒐集した。

（二）当時の一般的薬名を正名とし、別流派や古い薬名があれば一名として付記した。

（三）氣味は特定の先行文献を踏襲した。

（四）具体的出處は秘密とし、出處不詳薬とともに抽象的に表現した。

（五）薬効未詳薬には、漠然と心身によいと理解される主治文を作成した。

（六）上中下薬の三巻に分けた後、あるいは玉石・草木などの分類も併用した。

（七）上中下薬の主治文を調整し、以下に久服文を適宜付記した。

（八）最後に序録一巻を新作し、計四巻の『本經』を完成した。

こうして編纂された『本經』は、薬を患者や臨床家のみならず方士らにも販売するための、「薬の本質」テキストと呼んでいい。当時の理想だった治療・滋養・保健・不老長

生という、「くすり」の全分野も網羅しようとしている。これゆえ徐々に普及して神仙家や「名医」に利用され、「別録」の薬物や条文も増補された伝本が派生し、各種混乱を生じていた。

そこで本書を高く評価した陶弘景は、『本經』三六五葉の条文を正確に抽出し、後世増補の「名医別録」と判断した三六五葉の条文も抽出・整理した。さらに両者を朱筆と墨筆でモザイク状に大書し、薬対文と自注を小字双行で墨書きして『本草集注』三巻を編纂したのである。しかし各論の中下巻が長すぎて使用に不便なため、弘景ないし後の段階で七巻本に改められ、以後は七巻本系が普及した。そして中原をはさむ東の日本と西のトルファンから三巻本の資料が出土し、『小品方』も出現したことで、より正確に『本經』に遡上することが可能になつたのである。

引用文献

(1) 真柳誠 「医食同源の思想—成立と展開」『しにか』九巻一〇号七二一～七七頁、一九九八

(2) 藤堂明保『学研漢和大字典』一一三六頁、東京・学習研究社、一九七八

(3) 真柳誠 「三巻本『本草集注』と出土史料」『薬史学雑誌』三五巻二号一三五～一四三頁、二〇〇〇

(4) 藤枝晃「写本解題」、上山大峻『敦煌写本本草集注序録・比丘含注戒本（龍谷大学善本叢書一六）』二〇七～二一九頁、京都・法藏館、一九九七

(5) 岡西為人「『神農本草經に就いて』を読む」『日本医史学雑誌』一三二三号一～十三頁、一九四四

(6) 岡西為人『本草概説』五三頁、大阪・創元社、一九七七

(7) 渡辺幸三「中央亞細亞出土本草集注残簡に対する文献学的研究」『日本東洋医学会誌』五巻四号三五～四三頁、一九五四

(8) 渡邊幸三「陶弘景の本草に対する文献学的考察」『東方学報』二〇冊一九五～二二二頁、一九五一

(9) 小曾戸洋『小品方』序説—現存した古卷子本』『日本医史学雑誌』三二巻一号一～一五頁、一九八六

(10) 真柳誠「新発見、『小品方』卷一一・本草篇の研究」『薬史学雑誌』二四巻一号三七～四六頁、一九八九

- (11) 真柳誠「中国一一世紀以前の桂類薬物と薬名——林億らは仲景医書の桂類薬名を桂枝に統一した『薬史学雑誌』三〇巻二号九六〇一一五頁一九九五
- (12) 真柳誠「薬性論の検討第一報——性平について」『日本東洋医学雑誌』三三一巻四号一一五頁、一九八三
- (13) 真柳誠「古代中国医学における五味論説の考察——『内經』系医書の所論」『矢数道明先生退任記念東洋医学論集』九七〇一一七頁、東京・北里研究所附属東洋医学総合研究所、一九八六
- (14) 山田慶兒「本草の起源」『中國古代科學史論』四五一〇五六七頁、京都・京都大学人文科学研究所、一九八九
- (15) 真柳誠「薬性論の検討第三報——『新修本草』に見る唐以前の臓腑用薬」『日本東洋医学雑誌』三五巻四号一一一〇一一二頁、一九八五

(茨城大学大学院人文科学研究科教授)